

IDDNewsletter.....11

November
2021



特集

この七つの文字

例えば、高松次郎という美術作家がいます。

「この七つの文字」は、現代美術作家であった高松次郎の代表的な作品の一つです。

言語的な要素を組み入れた美術作品にもいくつかありますが、その取り上げられ方は、造形的要素の中に文字を組み込む手法とは一線を画しています。

今回は、高松次郎の作品から得られる知見を元に、「聾学校」の教育について考察してみたいと思います。

この七つの文字

例えば、高松次郎という美術作家がいます。

「この七つの文字」は、現代美術作家であった高松次郎の代表的な作品の一つです。

言語的な要素を組み入れた美術作品にもいくつかありますが、その取り上げられ方は、造形的要素の中に文字を組み込む手法とは一線を画しています。

今回は、高松次郎の作品から得られる知見を元に、「聾学校」の教育について考察してみたいと思います。

例えば、高松次郎という美術作家がいます。

そして、「この七つの文字」は、高松次郎の代表的な作品の一つです。

言語的な要素を組み入れた美術作品にもいくつかありますが、その取り上げられ方は、例えば詩や短歌等とイラスト的な要素とを組み合わせた作品であったり、文字の形態的要素を取り上げたレタリングの作品であったり、文字のデザインポリシーであるフォントの属性に着目した作品であったりします。

この高松の作品は、「この七つの文字」という文字がタイプライターで印刷されただけのものであり、造形的要素の中に文字を組み込む手法とは一線を画しています。

ここで気付かれた方もいるでしょうし、そして高松次郎を既知の方にとっては驚くことではありませんが、「この七つの文字」は、視覚的に把握可能な文字列の長さと言葉として読んだ時の意味内容とが完全に一致しています。このこと自体が、この作品が表そうとしている価値になりますが、これは「言語の恣意性」自体をモチーフとした作品であるとも換言できるでしょう。つまり、高松次郎がこの作品において表現の対象としたものは、文字の形態的要素ではなく、言語

による人間の認識自体にあるとも言えます。

人間は、言葉によって把握された自分の外側の世界を整理しますから、その整理のされかたというものは、ある程度、言葉の形式上の違いが反映されます。例えば、獲得した母語の違いによって、認識する虹の色の数は異なる、というようにです。そして、自分の外側の世界を把握する、ということは、この言葉による情報の整理のされ方にある程度依存しますし、それは、あるまとまりをもった視覚的要素の切り分け方自体を指しているともいえます。一つの要素を分けていくということは、「意味が拡張されること」を意味し、そのような行為の結果として新たな要素が出力されることが「分かる」ということにつながります。

本校の学生における学びの課題は、このあたりのことにあるように考えています。特に、日本語で表された文字列の読解において、表意文字である漢字の果たす役割には非常に大きいものがありますが、この時に「言語の恣意性」という壁は、彼らにとって大きな試練を与えることになるように思います。



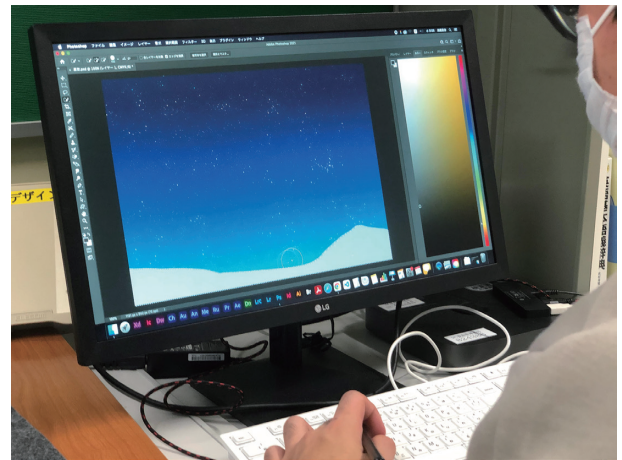


一例を示したいと思います。ある文章問題についてです。「空き缶を 100 個拾いました。そのうちスチール缶が 40 個でした。残りはどの缶が何個でしょうか」という問題について、少なくない学生が「空き缶が 60 個」と答えることがあります。おそらく差分という概念自体については理解されているのですが、文章の背景にある意味を読むことへのエスケープと、求められる回答を導く方略が視覚的要素に偏りすぎていること自体に原因があるように思われます。

ここでは、「どの缶」という問いについて、缶という文字が付いている言葉はどれか、という「文字面の一致」に視点を置いた方略を用いて読もうとしていることが窺われます。確かにこの方略は、表意文字である漢字が混ざった日本語の読解において、一見合理的にも思えます。「青い空」と「高い空」の上位概念は、確かに「空」ですから。しかし、著作権と著作物、著作者を抽象化したときに「著作」にはなりません。それぞれ、「権利」「もの」「人」が上位概念とするのが妥当でしょう。

このことの原因は、本質的には、文法事項の理解、つまり読み方の法則性が十分に教授されないまま、ひいては、言葉の組み立て方自体にあいまいさを残したまま、発問に対して何かしらの回答が求められる授業の構造に適応しようとした結果だと筆者は考えることがあります。

言葉について、ある程度書いた人の意図どおりに読むということは、自分の外側にある法則性に基づかなければならないですから、自分なりの憶測で読むわけにはいきません。しかし、聴児とろう児の日本語の向き合い方の違いに配慮が行き届いていない授業は、法則性に基づかない自分なりの「視再変換」を促すことになり、世界の把握のしかたを高次元化していくうえで、非常に大きな問題になってくるように思われます。本校生徒の読みの問題は、彼ら自身の問題で



はなく、このような聴児同様の「日本語の文法要素は、どう努力しなくても運用できる」ことを前提とした、これまでの指導の積み重ねにあるのかもしれない、そう思うことさえあります。

高松次郎の文字を組み入れた作品群は、言語学的な見地に基づいた言葉と意味の繋がり、ひいては人間の認識の有り様自体、現代的に言えば「メタ認知」自体を表現の対象としたものであると言えるでしょう。この作品が与えてくれる気づきは、私達聴覚障害教育の世界において、決して小さくないものであると考えます。

IDDN

Contents

特集

2-3 この七つの文字

例えば、高松次郎という美術作家がいます。
「この七つの文字」は、現代美術作家であった高松次郎の代表的な作品の一つです。
言語的な要素を組み入れた美術作品にもいくつかありますが、その取り上げられ方は、造形的要素の中に文字を組み込む手法とは一線を画しています。
今回は、高松次郎の作品から得られる知見を元に、「聾学校」の教育について考察してみたいと思います。

Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」
をお読みいただきありがとうございます。

新型コロナウイルスの感染状況も、一時期よりも大分落ち着いてきた状況ではあります。

ただ、道内広域から生徒学生が集まる本校においては、
今後も感染予防のための十分な対策が求められます。

学生の健康と安全を第一に、深く、充実した学びのため
環境整備に今後とも努めて参ります。



○令和4年度新入生の施設見学・教育相談を受け付けております

今年度もいよいよ後半戦です。現在、令和4年度新入生について、施設見学と教育相談を受け付けております。また、令和5年度以降の新入生についても、随時受け付けております。お気軽にお問い合わせください。

お問い合わせ：北海道高等聾学校専攻科 入学選考事務局（担当：中、桑原）

ファックス：0134-62-2663 電話：0134-62-2624 電子メール：koutourou-z0@hokkaido-c.ed.jp

情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

November 2021 11

IDDNewsletter

November 2021

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。